

## 二足のわらじ 人生

（よねざわ すぐる）  
 米澤 傑（昭和四十三年卒）  
 鹿児島大学名誉教授（医学部・病理学）

私の「医学」と「音楽」の二足のわらじ 人生でのハイライトは以下ようになります。

「医学」では、日本病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」受賞。「高松宮妃癌研究基金学術賞」受賞。各種がんメーカー等の論文の著者世界ランキング第六位（日本人第一位）にランクイン。

「音楽」では、日本クラシック音楽コンクール声楽部門第一位、ならびに、全部門でのグランプリ獲得、太陽コンコルト・カンツォーネ・イタリアーナ優勝。オペラ「トゥーランドット」の主役・カラフ王子。鹿児島県芸術文化奨励賞受賞。ヨーロッパで録音したCD「誰も寝てはならぬ／米澤 傑 テノール・オペラアリア集（G・ステーフアノ指揮・ソフィア国立歌劇場管弦楽団）」のヒットチャートでの度々の第一位。

### 「医学」のこと

この「渦の音」は、卒業生もお読みになり、医学にご興味のお有りの方もいらつしやると思っていますので、ごく簡単に、私の「医学」関連について述べます。「病理学」とは：簡単に申し上げますと、「身体から採取された顕微鏡標本で、がんか、がんでないか」の最終診断を行なっている医学分野で、がん”をはじめてとする様々な病気がどのようにして発生するかという研究も行なっています。

私は、二〇一〇年四月二十八日、東京で開催された第九十九回日本病理学会総会において、宿題報告講演「ムチン・ヒト癌における臨床病理学的意義と遺伝子発現機構の解明から腫瘍悪性度早期診断システムの構築まで」を行い、高い評価を得ることができ、病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」を受賞

し、その内容を、その年の年末には「Mucins in human neoplasms: Clinical pathology, gene expression and diagnostic application」という二十頁にわたる英文論文として出版でき、私の三十年間にわたる「ムチン研究」に関するライフワークをまとめることができました。「宿題報告」とは、日本病理学会独特のシステムで、病理学の研究面で著明な業績を挙げている研究者の中から、宿題報告講演担当者が選ばれ、一年半前に正式に発表され、一年半かけて、さらに、研究を進展させてまとめた講演を行い、講演後には、その研究内容を英文総説論文として発表するようにとの「宿題」が課される訳です。私の研究内容につきましてご興味のお有りの方は、ホームページ「傑作の会」のURL: <http://kesaku-no-kai.com/> の「スグル先生の聴診器」のコーナーの米澤の病理学的研究で、そのまとめをご覧いただけますし、宿題報告講演の様子は、「記事／対談／談話」のコーナーの二〇一二年八月一鹿兒島市医報第五十一巻八号の前半に掲載されています。

## 幼少期から中学生まで

私が生まれたのは、鳴門市撫養町林崎という鳴門市中心部か

らは外れた路地裏でした。祖父母、両親、弟と私の三世代が一つ屋根の下に暮らし、両親はともに学校の教師をしており、私の幼少時期は、祖母に面倒を見てもらうという「完全な」お婆ちゃん子”でした。

特に、これと言ったエポックメイキングなこともない幼少児期でしたが、優しくも厳しい祖母に接し続けた幼少児期に、私の性格形成の基礎が築かれたといっても過言ではありません。また、よく振り返ってみますと、件数は決して多くはないのですが、私の「医学」と「音楽」の「根本」が見えてきます。基本的にはとても優しいお婆ちゃんでしたが、イタズラ等をした時には、ズボンを下ろされて、お尻を平手打ちされるという厳しい面もありました。

まさに「一身一体」で祖母と暮らした幼少児期でしたので、祖母が亡くなった小学校六年生の時には、祖母の臨終を見届けた後、思わず外に飛び出し「絶対に死なない薬をつくる！」という「誓い」を叫んだのを、今でもハッキリと覚えています。私の幼少児期の性格形成の根本であった祖母の死は、私の「医学」への道の深層心理的基礎となりました。

私の「医学」が、単に、「医療」だけではなく、「医学研究」という道へ進むのには、父の弟である私の叔父の影響があります。叔父は、高校時代までは私達と同居しており、私もとても良く可愛がってもらいました。早稲田大学理工学部に進学し、橋梁設計の勉強をして大学を卒業する頃に、その叔父が、大学院進学について、自分の兄である私の父にさかんに相談をしており、「教授が研究をさらに進めるために大学院への進学を奨

めてくださっている」というようなことをよく話しており、幼心にも「大学教授」という職業があり、敬愛する叔父が自分の将来について相談をするくらい価値の高い職業なのだと思います。その後、大学教授の重要な仕事の一つが「研究」であることを知り、「研究への憧れ」になったのです。幼心の「誓い」と「研究への憧れ」が合体して、最終的に、「医学部教授」という職に就いたということになります。

幼稚園から中学校までは、山も谷もない淡々と日々を過ごしたのですが、取ってエポックを挙げれば、幼稚園の学芸会で「桃太郎」を演じたことと、中学生の時に徳島県の独唱コンクールに出場したことです。中学校の音楽の先生から、突然、徳島県の独唱コンクールに出場するように命じられ、私自身はもちろん、両親も「お前が歌うのか!？」といった状況でした。変声期の頃で、圧倒的に女子生徒に有利な年齢ということもあり、男子生徒は誰も入賞しませんが、私は、予選を通過できた男子生徒二名のうちの一名となり、「歌がうたえるんだ」と自覚する大きな転換点となったことは確かです。

城南高校二年生の時には「NHKのど自慢」に出場しました。その頃の「NHKのど自慢」は、現在のようバラエティ番組ではなく、かなり「コンクール」という側面を持っており、「歌曲の部」「民謡の部」「流行歌の部」と三部に分かれて審査が行われていました。私は、徳島県大会の「歌曲の部」で優勝しました。

その後、医師になってから、プロ歌手も対象としている「日本クラシック音楽コンクール」声楽部門第一位、ならびに、全

部門でのグランプリを獲得し、「太陽コンコルス・カンツォーネ・イタリアーナ」でも優勝を果たしました。

## 城南高校時代

私は、城南高校へ入学と同時に、バレーボール部と音楽部に入りました。ただ、バレーボール部には部員が四名しかおらず、試合に出ることも出来なかったのですが、日々、トス、アタック、回転レシーブ等の練習をして汗を流すことで満足していました。

音楽部には、歌を趣味にする人達、様々な楽器を演奏する人達の多彩な人物が、かなりの人数集まっていました。高校二年生の時に、私が部長に選任され、秋の文化祭で、ミュージカル「マイ・フェア・レディ」を上演しました。私は、「君住む街角」という美しいメロディーの歌をうたうフレディ役を演じながら、総監督と演出を担いました。舞台衣装は、それぞれ個人で準備し、舞台装置も手作り、ピアノの得意な音楽部員が必要なメロディをずっと弾き続ける中、ところどころに、様々な楽器の演奏を加え、「立体感」を持たせるという工夫をいたしまして、「マイ・フェア・レディ」公演は大成功を収めました。

「マイ・フェア・レディ」とともに、私の高校時代の大きなハイライトは、「徒歩旅行」です。まずは、高校二年生の夏休みに、鳴門市から徳島市を経て、山の方に向かって吉野川添いの道をさかのぼり、四国の「へそ」とも言える池田町を経て南下し、高知市を目指すという、全行程二〇〇キロメートルを五

日間で踏破するという「大旅行」です。私の親友の二人とともに、三名でこの大旅行に挑戦しました。一泊目は、徳島市の私の叔母の家に泊まりました。二泊目は、徳島市と池田町の中間地点である脇町の安旅館に宿泊、三泊目は、池田町のお寺に宿泊させて頂きました。そのお寺でご馳走下さいましたカレーライスの味を今も忘れることが出来ません。四泊目は、池田町と高知市の中間地点にある大豊町のユースホテルに宿泊し、五日目の夜遅くに高知市に到着しました。高知市到着の直前の高い山から見た、街の灯りが点灯している高知市の夜景は、いまでも胸に残っています。

さて、この夏の「五泊徒歩旅行」の成功に気を良くして、その年の暮れも近い冬に、後輩と二人で、高松市から鳴門市まで、間にある「讃岐山脈」を乗り越えての全行程八十キロメートルを一気に踏破することを試みました。高知市への夏の「徒歩旅行」は「暑さ」で大変でしたが、この高松市からの「山脈越え縦断」は「寒さ」との戦いで、「讃岐山脈」の頂上付近に達しました時には、雪が降り始め、しかも、完全に道に迷ってしまいました。日は暮れかかるし、このままでは「遭難」という二文字が頭をよぎりました。そこで、私がとった行動は、とにかく出来るだけ高い所に登って、周囲の地理をハッキリ把握しようということでした。急いで、山頂近くまで登りましたところ、眼下の樹木の間、アスファルトで舗装された自動車道を発見でき、その方向に向かって下山をして、その自動車道に辿り着くことが出来ました。後は、ひたすら、その自動車道を歩き、夜中遅くになって、なんとか鳴門市に帰着できました。自宅に

帰り着き、玄関で、リュックサック等の装備を放り出して、しばらくグッタリと横になっていました。まさに「遭難」一歩手前の危ない「山脈越え縦断」でした。

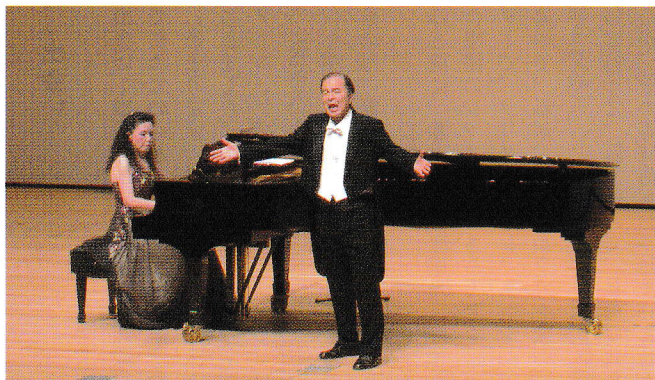
高校二年生の時の修学旅行は、各々の生徒の希望により、「東京方面の有名大学見学ツアー」と「九州方面の温泉旅行」から選択することが可能で、進学校であった城南高校の九割方の生徒は「東京方面の有名大学見学ツアー」を選びましたが、私は迷わず「九州方面の五泊六日の温泉旅行」を選びました。三日目は鹿児島の名勝庭園「仙巖園」のすぐ隣の旅館に泊まり、翌朝は早起きをして、桜島から登る朝日を見て大変大きな印象を受けました。今でも、その光景が目には浮かび上がります。まさに、これで、私の鹿児島大学への進学が決まった訳で、人生の大きな分岐点であったこととなります。

### 鹿児島大学時代とその後

私どもの大学受験の頃は、国立大学受験に関しては「一二期校」と「二期校」といった種類分けがなされていきました。「一二期校」受験で京都大学医学部に合格できず、「二期校」受験を考えた時、西日本の「二期校」で医学部があるのは、山口大学と鹿児島大学のみで、修学旅行で見た「桜島から登る朝日」により、迷わず、鹿児島大学医学部を受験し、幸運にも合格できました。入学後、男声合唱団に入部したのですが、声量の大きな私の歌声がどうしても飛び出してしまい、指揮者から、いつも歌声のボリュームを抑えるように注意されることで、とても居心地

が悪く、一年後には、合唱団には別れを告げ「独唱」に力を入れることにしました。教養時代に、私は、取得可能な単位全の一六単位を取得しましたが、それでも、時間は有り余り、空き時間には、しょっちゅう教養キャンパスのすぐ隣にある教育学部音楽科のピアノ室に行き、発声練習をしていました。小さなピアノ室だけでなく、教育学部音楽科で最も大きくグランドピアノのある

教授室で練習をしていましたところ、クラリネットの先生が走り込んで来られ、すっかり、大目玉をいただくという覚悟を決めたのですが、なんと、その先生が「貴方はとても素晴らしい声を持っているから、正式に声楽のレッスンを受けない」とのことです、まるで、拉致されるようにその先生の車に乗せられ、鹿児島短期大学の声楽教授のところ连接到行



徳島でのリサイタル

かれ、声楽のレッスンを受けることになりました。そのことが、私の声楽テクニクの基礎となり、だんだんと、演奏会で「独唱」を歌う機会も増え、これから述べます井上先生や松本先生との幸運な出会いもあり、一流の指揮者や歌手との共演、オペラ「トゥーランドット」への主役出演、ヒットチャートの一位を獲得するようなCDのリリースへ繋がり、世界一流の歌手ともジョイント・リサイタルをするような「音楽活動」へ発展し、

ニューヨークの音楽記者が『米澤の歌った「清きアイーダ」の最後の高音は、メトロポリタン歌劇場でも聴いたことのない素晴らしいものであった』と世界中に発信して下さるまでになりました。そして、二〇二二年七月八日には、故郷・徳島の「あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）」で開催されました「米澤 傑 テノール・リサイタル」で、これまでの私の集大成を歌うことが出来ました。

### 音楽活動へ至る道——出会い」とご縁

「日本の演奏家ークラシック音楽の1400人」という本が出版されており、小澤征爾さんや辻井伸行さんと一緒に、「米澤 傑（医学者、声楽家（テノール） 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授）」も掲載されています。その私の項の「印象に残る人物、目標とする演奏家」に、「井上道義、松本美和子——人柄の素晴らしさ」と掲載されていますが、まさに、そのお二方との「出会い」と「ご縁」により、私の音楽活動の場が広がりました。

## 井上道義先生との「出会い」

井上道義先生との「出会い」は、井上先生が、一九八五年に開催されました鹿児島で初めての「かごしま県民第九演奏会」の指揮をなさったことに始まります。この演奏会のソリストはオーデイションで選ばれました。テノールに課された「課題」は、マーチの部分のテノールソロでした。このテノールソロを歌うのは大変に難しく、音楽大学の声楽科出身の方々も沢山オーディションを受ましたが、このソロを最後まできちんと歌い通すことが出来たのは、私一人のみで、私がソリストに選ばれました。

演奏会本番の二か月ほど前に、井上先生が鹿児島にお越しになり、オーケストラや合唱団のレッスンをなさるとともに、会場の鹿児島県文化センターで、ソリストへもレッスンをして下さいました。レッスン途中で、私が、テノールソロを歌い始めた途端、井上先生は指揮をやめて、ピョンと舞台から飛び降り、ホールの最後部まで走って行って、腕を組んで、私のソロを聴いていらつしゃいました。その時は何もおつしゃいませんでした。おそらく、私の声が「そば鳴り」ではなく「いかに遠くまで響くか」ということを確かめになっていらしたと想像しています。翌年の春、井上先生からお電話を頂き「井上道義です。今度、NHKで第九をうたおう」という番組をつくるので、米澤さんにテノールのソリストをお願いしたい。」とのことでしたので、喜んでお受けし、東京のNHKに何度か通い、

二期会の歌手の方々と一緒にソリストを務めました。

なお、私は、一九九三年に、幾つかの演奏会での私の歌の録音を集めたCD「米澤傑 テノールコンサート」(収録曲の多くのピアノを、妻の悦子が担当しています)を自費出版しています。このCDには、井上道義先生の『(1)この国に生まれなかつたら、傑はホセ・カレラスのはずだった! (2)神に与えられた才能とほんの少しの努力。これが本当の歌う欲び! (3)日本中のテノールよ、嫉妬しろ! 井上道義(指揮者、テノール発掘人)』というご推薦のお言葉が掲載されています。このCDをお聴き下さいました世界最高の指揮者のロリン・マゼール先生は、色紙に、「To Dr. Yonezawa, Possessor of a lovely voice and "feel" for opera. Good luck!」というお言葉をお書き下さり、サインを下さいました。

## 松本美和子先生との「出会い」

NHKの「第九をうたおう」が全国放送され、それをきっかけに、全国各地より「第九」のソリストのお話を頂き、ナポリ市のサン・カルロ歌劇場で開催された「第九のナポリ公演」でのテノールソリストも含め、ベートーヴェン「第九」のソリストは一〇回を超えます。第九アジア初演の地である私の生まれ故郷の徳島県鳴門市で、毎年、全国から合唱団員が集まって開催される「鳴門の第九」の関係者の目にも留まり、たびたびテノールソリストとして招聘されました。一九九六年六月、私が鹿児島大学医学部の助教授であった頃ですが、鳴門の「第十

五回記念第九演奏会」で、国際的ソプラノ歌手の松本美和子先生と初めて共演いたしました。その演奏会の後、松本先生が「一週間後に、イタリアの高名なオペラプロデューサーのジャンフランコ・パステイネ先生が東京にお越しになるから、是非、貴方の声を聴いていただきたいの！」とのことで、パステイネ先生と松本先生にオペラアリアやカンツォーネをお聴きいただきましたところ、お二方揃って、私のイタリアオペラ界へのデビューを強力にお勧め下さいました。

まず、松本先生が「私には実績がありません。超一流会社にお勤めであった方を、退職させて、ミラノ・ヴェルディ国立音楽院に留学させ、バリトン歌手に育て上げました。」とおっしゃって、「貴方も歌手に転向して、イタリアデビューをすれば良いのに」と、パステイネ先生と二人で、強力にイタリアで歌うことをお勧め下さいましたが、私が医学の道を変えたい意志がないことをハッキリ申し上げましたところ、「では、オペラシーズンの一か月半だけイタリアで歌い、あとは、医学部で仕事をしたいから」とまでおっしゃって下さったのですが、当時、助教教授であった私は「三年後に教授選があり、立候補します。医学部の教授選はかなりの難関で大変ですから」と申し上げましたところ、お二方ともやっとご理解下さいました。

私は、小学校卒業文集の「将来の夢」に、「大学教授」とハッキリと書いており、その頃から、大学での研究生活に憧れていましたので、お二方からの熱心なイタリアデビューのお勧めがあっさりお断りした次第です。「amazon」での通販サイトで、私のCD「誰も寝てはならぬ／米澤 傑 テノール・オペラア

リア集」へのコメントとして、「日本にもこんなに素晴らしいテノール歌手が出るようになったのかと驚いた。「天は二物を与えず」とは昔から言われているが、この米澤先生には天は二物を与えた。鹿児島大学医学部教授として病理学の研究を続ける傍ら日本有数のテノール歌手として我々凡人には考えられない。声も素晴らしく、歌も理知的で知性がある。若い頃から歌一本で活躍していたらと残念に思う。まさに日本のマリオ・デル・モナコの声を持つ医学部教授である。」とお書き下さっています。

### CD 「誰も寝てはならぬ／米澤 傑 テノール・オペラアリア集」に至る道

私は、CD「誰も寝てはならぬ／米澤 傑 テノール・オペラアリア集」を発行する前に、一九九三年にはCD「米澤 傑 テノールコンサート」を、二〇〇二年には、霧島の「みやまコンセル」でのリサイタル（ピアノ・久邇之直）と、「日本・ルーマニア国交一〇〇周年記念コンサート（指揮・尾崎晋也）／ルーマニア国立トゥルグ・ムレシユ交響楽団」で歌いました録音を取録しましたCD「米澤 傑 テノールの魅力」という自費出版の二つのCDをリリースしていました。そのうち、私の声楽活動の集大成として、フルオーケストラとの共演での「オペラアリア集」を発行したいと思うようになってきていました。

ちょうどその頃、大手レコード会社から直接お電話を頂き、「先生のお声で、これまでの通念を完全に覆すような、日本歌

曲集のCDを収録したい」というご提案を頂きました。フルオーケストラでのオペラリア集で頭がいっぱいであった私は、そのご提案を即座に断ってしまいました。今、考えますと、もったいないことをしました。とも思えます。なお、その時にお伺いしてみたのですが、「フルオーケストラでのオペラリア集」は、大手レコード会社であっても、費用的にとっても無理である」とのことでした。

私の熱心なファンの方が、日本最高の録音技師、録音ディレクター、ならびに、録音プロデューサーにお声掛けを下され、東京で、私のフルオーケストラでのオペラリア集のCDの作成について相談をしましたが、暗礁に乗り上げてしまい、話が進まなくなっていました。そこで、思いきって、松本美和子先生のお宅に伺いご相談を申し上げましたところ、その場で、すぐにイタリヤのジャンフランコ・パステイネ先生にお電話を下されました。

我々ではどうしようもなかったことが、どんどんお話を進み、数日のうちに、パステイネ先生が、イタリア人指揮者のジョヴァンニ・デイ・ステーパーファノ氏



とブルガリアのソフィア国立歌劇場管弦楽団にご依頼をして下さり、二〇〇四年のゴールデンウィークに、ソフィアで最高の「ブルガリアホール」を借りきって録音を行うことまで決まりました。ゴールデンウィークの始まりに合わせてすぐにイタリヤに飛び、指揮者のステーパーファノ氏とピアノを使つての打ち合わせを行った後、ソフィアに入り、三時間、三時間、六時間、三時間と四日間連続で歌い続け、計十五時間で十五曲（一時間で一曲のペース）の収録をするという「離れ業」で録音を致しました。一時間に一曲録音ということの実際は、まず、初対面同士の指揮者とオーケストラだけで音合わせを行い、次いで「小さな声で歌ってみて」と、曲想も含めた打ち合わせと試し歌いを行い、そして、「はい、本番テイク」ということで、本番収録となり、ほぼ「一発録り」というペースで録音が行われてゆきました。オーケストラのメンバーから「あんた喉が強いネー」というお言葉まで頂きました。松本先生とパステイネ先生もずっと収録に臨んで下さり、松本先生は、そのCDのジャケットの「このアルバムに寄せて」というライナーノーツに「四日連続でこれだけの難曲を録音できたテノール歌手はかつて誰もいません。米澤さんはこの驚くほかほかはない離れ業を成し遂げてしまったのです。」とお書き下さっています。

以上のような収録でしたので、全ての経費を私一人で負担いたしました。そして、気の遠くなるほどの費用がかかりましたが、幸い、NHKの芸術劇場やラジオ深夜便をはじめ、沢山のマスコミにお取り挙げ頂き、ヒットチャートの第一位をたびたび獲得するほどよく売れましたので、CDのリリースから、かなり早い期

@TOWER JP -Ranking 09/07/01 7:21

**@TOWER.JP** ログイン 新規登録 アイテム=CLASSICAL 検索

**TOWER RECORDS** 登録情報 注文履歴 ヘルプ ショッピングバッグを見る

**☆ SUPER PRICE 最新ヒット輸入盤最大40%OFF** **TOWER RECORDS** 30th Anniversary!

**J-Classical ウィークリーチャート** ジャンル: J-Classical  
各ジャンルのウィークリーチャート

MUSIC

下の商品を    
選択した商品を

※アーティスト名をクリックするとディスコグラフィが、タイトルをクリックすると収録タイトル詳細が表示されます。

タイトル	アーティスト	価格 (税込)
1  誰も寝てはならぬ/米澤傑		発売中 CD ¥3,000
2  debut / 辻井伸行	辻井伸行	発売中 CD ¥3,000
3  ラフマニノフ: ピアノ協奏曲第2番 / 辻井伸行, 佐渡裕, ベルリン・ドイツ交響楽団 [CD+DVD]	辻井伸行	発売中 CD ¥3,000
4  蕨本真理の芸術		発売中 CD ¥2,800

## タワーレコードのランキング

間で、CD作成に掛かった費用を全て補填することが出来ました。日本人テノール歌手で、フルオーケストラでのオペラリア集を発行できていますのは、プロ歌手を含めても、私一人のみであるという「希少価値」も、このCDがよく売れた一因であると考えられます。

## CDのヒットチャート第一位獲得

私のCD「誰も寝てはならぬ/米澤傑 テノール・オペラリア集」が、ヒットチャートの第一位を獲得するほど売れました。高名な音楽評論家の故・黒田恭一先生のご推薦と応援が大きいことも確かです。黒田先生は、「家庭画報(第四十七巻第十号、二〇〇四年)」で「今、黒田さんが最も注目するオペラ人」の二名をお挙げになり、一名は「サイモン・ラトル+ベルリン・フィル」、そして、もう一名が「米澤傑」でした。その記事では、「マリオ・デル・モナコの声を持つ医学部教授に出会う」という題目で、黒田先生と私との対談が掲載されています。

さらに、音楽雑誌の「モーストリー・クラシック」(通巻九十一号、二〇〇四年)の「巻頭言」『黒恭の感動道場』に、私のCDについて「玄人/素人の壁超えた歌唱に驚き」という記事をお書き下さり、「サライ」のような一般雑誌へも紹介記事をお書き下さり、「BURNA」という「ヘビメタ」の雑誌にまで「オペラを見事にきかせるテノール、しかしてその正体はうたうお医者さん：!？」という紹介記事をお書き下さいまし

た。CDの帯には「天から授かった珠玉の喉を磨きに磨いて、その声を本物のテノールのものにした米澤傑。一級のテノールをきいたときだけに味わえる至福の瞬間! (音楽評論家 黒田恭一)」というご推薦のお言葉を、ジャケットのライナーノートには「聴け!これがテノールだ!」というタイトルで「テノールのうたいあげる情熱がいかに純粹で、ひたむきで、熱いかを実感したかったら、米澤傑の声と歌唱に真摯に耳をすますに過ぎる。まさにこれがテノールである。」とお書き下さっています。

高名な音楽プロデューサー 中野雄先生も、音楽雑誌の「モーストリー・クラシック」(通巻一六二号、二〇一〇年)に、『上杉春雄(ピアノリスト)と米澤傑(テノール)―天は二物を与える?医学と音楽の二足のわらじ―』という記事で、札幌の神経内科医でピアノリストの上杉先生と、鹿児島病理医でテノールの私を、日本の医学界には、「東の上杉、西の米澤」と並び称される、二人の鬼才が活躍している。」とご紹介下さっています。さらに、その「続編」として、「モーストリー・クラシック」(通巻一八八号、二〇一三年)に、『再認識しよう!脳は決して疲れない 天が二物を与えた上杉春雄と米澤傑の後日談』という記事で、美智子皇后陛下御臨席のもとサントリーホールで開催された「モーツァルト・レクイエム」での私のソリストの模様などを、私の専門の「病理学」での活動と共にお書き下さっています。そして、二〇二一年九月に発行されました「モーストリー・クラシック」(通巻二九四号、二〇二二年)に「天は二物を与える・再論 医師・テノール歌手 米澤傑の現在」という記事で、私の「医学研究」について、この上なく

判りやすく、かつ正確にご解説下さり、私の「音楽への道」につきましても、「声楽との出会い」から、名指揮者の方々との共演や「トゥーランドット」に至るまでを躍動的にお述べ下さり、イタリアデビューをしていたら「本場で活躍する稀有な邦人テノール」が誕生していたかも知れないが、「米澤は医学部教授への道を選択、日本の医学界は貴重な人材を失わなくて済んだ。」とおまとめ下さっています。

二〇一九年十二月には、新しいCD「米澤傑 テノールライブ ―オペラリア・カンツォーネからミュージカル・映画音楽まで―」をリリースいたしました。ライブ録音ですので、私の「一発勝負の歌」というスリルとともに、コンサート会場の臨場感(新型コロナウイルス感染症拡大の前に録音されていますので、一曲ごとに、客席からのアップボウや歓声の嵐)をお聴きいただけます。米澤傑 白熱のライブ(音楽プロデューサー 中野雄)というご推薦のお言葉を下さいます。



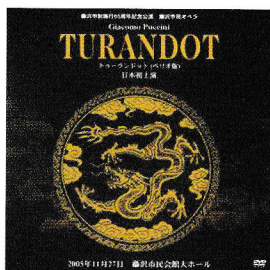
## オペラ「トゥーランドット」への出演

二〇〇五年、イタリアでは、ジャンフランコ・パステイネ先生のご推挙により、サンタマルガリータの夏の音楽祭での野外劇場で、日本では、神奈川県藤沢市民会館で、オペラ「トゥーランドット」の主役・カラフ王子を演じました。藤沢の「トゥーランドット」では、舞台装置だけで八、〇〇〇万円、総額は億単位の費用がかかったとのこと、全幕の収録がDVDとして販売されています。（文中のCD・DVDは、鳴門市大道銀天街「ひかりや」店頭、あるいは、検索「楽天市場 米澤傑」でご購入頂けます。）



「トゥーランドット」の舞台

日本でのオペラ「トゥーランドット」(ペリオ版・日本初演)の公演は、二〇〇五年の十一月の藤沢市民会館でしたが、総監督・畑中良輔、指揮・若杉弘、演出・栗山昌良、という当時の日本最高の布陣で、私以外の歌手は、全て、二期会のトップスターの方々でした。その「トゥーランドット」公演の二年前に、突然、畑中良輔先生からお電話を



「トゥーランドット」DVD

いただき、「二年前あげるから、トゥーランドット」のカラフ王子役の勉強をして、藤沢市民オペラで、カラフ王子役を歌い仕上げなさい。」とご下命を受けました。早速、ピアノ譜でも厚さが3cmはある「トゥーランドット」全曲の楽譜とCDを購入し、鞆には、楽譜とCDを入れておき、通勤時、電車やバスに乗っている時間などには、いつも楽譜を眺めながらCDを聴いて、とにかく歌詞とメロディを覚えるという作業に入りました。ピアノ譜でもある妻にもピアノを弾きながら歌ってもらい、まさに「口移し」でメロディを覚えてもらう、ということもしよっちゅうでした。本番の四か月前くらいからは、演出家のもとでの「舞台稽古」が始まり、月曜日から金曜日までは、医学部教授としての仕事をを行い、土曜日の一番便で藤沢へ行き、一泊二日で「舞台稽古」に参加し、日曜日の最終便で鹿児島に帰り、また、教授職の仕事を行うという「二重生活」が続きました。いま思い返しても、まさに「ズツと」するような四か月前でした。しかし、本番で、見事に、カラフ王子役を歌い演じきり、幾度にもわたる「ブラボーの嵐」のカーテンコールの後、幕が降りた舞台上で、演出の栗山昌良先生から「これで、ひとりのテノールスターの誕生だな」とおっしゃっていただきました。まさに「長い苦しみ、一瞬の喜び」の典型例で、その瞬間があるからこそ、長く苦しい練習にも耐えられるのです。